科目のゼミが必修で、一つのゼミの一週あたりの宿題の量は、ギリシア語・ラテン語の一次史料の他、本や論文が四〇〇～五〇〇頁ほどあり、これが三科目となるとかなりの負担で、とくに一年目はほぼ図書館と寮の往復で終わってしまった。約三時間のゼミは通常最初から最後まで議論で、初めの頃は議論が白熱すると英語がわからなくてついていけず、苦労したのを覚えている。

また、AHMAは考古学にかなりの重点を置いており、一シーズン以上、地中海地域での発掘もしくは考古学プログラムに参加することが義務づけられていた。私は、九五年の夏にアテネのアメリカ古典学研究所、九六年の夏にローマのアメリカン・アカデミーの考古学プログラムに参加し、各三カ月、現地でフィールドワークを行った。おかげで、図書館にこもっての猛勉強と地中海の太陽の下でのフィールドワークとをうまく切り替え、メリハリのある留学生活を送ることができた。

指導教官のR・シーリー先生と（1996年）

アテネのアメリカ古典学研究所のプログラムに参加した1995年夏。休日にスニオン岬のポセイドン神殿で

財団の奨学生としての二年間の後は、バークレーから奨学金を受け、TA（Teaching Assistant）をしながら留学を続けていけることになった。アメリカの大学のTAは、現在の日本の大学でのTAのように教員の授業をサポートするという形態ではなく、完全に独立して学部生の授業を担当する場合が多い。私は、留学三年目の秋学期から、古代ギリシア・ローマのさまざまな史料を学生たちに読ませて議論していくというゼミを週二コマ担当した。学生たちに発言させ、それを整理してさらに議論をリードするという作業を英語で行うのは思ったより大変で、三年目とはいえ、英語の苦労は尽きなかった。学生たちの使うスラングにも初めの頃は慣れず、一コマ二時間がとてつもなく長く感じられたが、普段大学院生としてゼミに出ているだけでは気づかない教育の場における日米間の文化の違いにもじかに触れることができ、実に貴重な経験となった。

アメリカ留学がくれたもの

帰国後は母校の研究室の助手になり、その時期に博士論文を完成させ、その後、静岡大学に職を得て現在に至る。この三月、アメリカ留学時代に集中的に取り組んだ研究を発展させて、前四世紀後半のアテネ政治史についての小著（『アテネ 最期の輝き』岩波書店）をまとめたが、執筆しながら、天井まで本がうずたかく積まれた薄暗いシーリー先生の研究室で時間を忘れて議論したことなどがなつかしく思い出され、あの四年間で学んだものの大きさを痛感した。

古代ギリシア史という学問の研究では、日本人研究者はギリシア語やラテン語の史料を読み込む能力などにおいて欧米人にはどうしてもかなわず、大きなハンデを負っていることは確かである。しかし留学生活の中では、同じ史料を読んでもアメリカ人はこう考えるのか、と驚き、日本人である私とアメリカ人の思考様式の差違、そして、古代ギリシアを見つめる眼差しの違いを肌で感じることがしばしばあった。そうした経験を通し、日本人研究者として、古代ギリシア・ローマに自己の文化的アイデンティティを求める欧米の研究者たちとは全く異なる視点から古代ギリシアにアプローチできるという強みがあることを実感として理解できたのも、留学の大きな成果だったと今あらためて思っている。

一〇年を経て振り返るアメリカ留学

国際文化教育交流財団一九九三年度奨学生。八九年東京大学文学部西洋史学専修課程卒業。九三―九七年米国カリフォルニア大学バークレー校大学院博士課程留学。九八年東京大学大学院人文社会系研究科博士課程修了。古代マケドニアのフィリポス二世についての研究で博士号（文学）取得。東京大学助手を経て九九年より現職。専門は古代ギリシア・マケドニア史。

静岡大学人文学部准教授　澤田典子（さわだ　のりこ）

●国際文化教育交流財団は、経団連第二代会長故石坂泰三氏の遺徳を記念し、一九七六年に設立された。これまでに、世界三一カ国の大学・大学院へ一七二名の日本人留学生を派遣するとともに、世界三七カ国四九〇名の外国人留学生への奨学金の供与や講演会等を実施してきている。

カリフォルニア大学バークレー校での四年間の留学から帰国して、はや一〇年余が過ぎた。国際文化教育交流財団（石坂財団）の奨学金をいただいて実現した留学が現在の私の大きな糧となっていることを、一〇年を経た今、あらためて実感している。

留学が「夢」から「現実」に

古代ギリシア史を専門とする私が留学を思い立ったのは、修士論文を書き終えて博士課程に進学してまもない一九九二年である。当時、課程博士制度が本格的に始動し、博士論文に向けてこれまでの研究をどう発展させていこうかと思い悩んでいた頃だった。古代ギリシア史の中でも日本では研究者がごく少ない前四世紀の政治史とマケドニア王国史を研究対象としている私は、この分野で最も研究が盛んなアメリカで研鑽を積んでみたいとかねてから思っており、また、子どもの頃に夢中になって見たアメリカのホームドラマ『ゆかいなブレディ家』の影響からアメリカでの生活への漠然とした憧れもあったので、留学するならアメリカ、という希望は修士課程の頃から抱いていた。ただ、古代ギリシア史という「実学」には程遠い分野でアメリカに長期留学できる奨学金はほとんどなく、私の希望はあくまでも「夢」のままだったのだが、博士課程一年の夏、研究分野や留学先を問わず二年間の支援をしてくれるという石坂財団の奨学金制度のことを知人から初めて知らされた。なんと奇特な制度だろう、と驚きつつも応募してみたら幸運にも採用され、こうして私の留学の「夢」は、あれよあれよという間に「現実」になったのである。日本万国博覧会記念機構ならびに財団の柔軟な支援方針に、あらためて心からお礼申し上げたい。

バークレーでの日々

それまで一度も海外旅行をしたことがなかった私にとって、留学生活のスタートが文字通り初めての海外となった。

留学先をバークレーに決めた最大の理由は、ギリシア政治史の世界的権威R・シーリー先生の存在だった。学問における厳格さとは対照的に穏やかであたたかいお人柄のシーリー先生は、先生にとって初めてのアジア人留学生である私に、常に親身になって接して下さった。先生との交流は現在もたえることなく続いているが、研究者としても教師としても、先生は私の大きな目標であり続けている。

バークレーでは、Ancient History and Mediterranean Archaeology（通称AHMA）というコース（博士課程）に籍を置き、古代ギリシア史・考古学・貨幣学を集中的に学んだ。AHMAは、歴史学・古典学・美術史・人類学・考古学等の諸分野にまたがる、古代地中海世界に関する総合的プログラムで、アメリカにいくつかある同種のプログラムの中では草分け的存在である。AHMAでは毎学期三

本奨学事業は、日本万国博覧会記念機構（http://www.expo70.or.jp/）の助成金を得て実施している